

〈書評〉上田雄・孫栄健（1990）『日本渤海交渉史』  
〈文献紹介〉『1982年12月のAncona地すべり：変わりやすい速度で発達する深層重力的斜面変形の事変』

市瀬, 由自

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

1991-03-31

【書評】

上田雄・孫栄健：日本渤海交渉史，六興出版，1990年，249ページ，表14，写真3，地図2，定価2000円

日本の古代史上，8世紀より10世紀にかけて善隣友好関係にあった渤海（ぼっかい）国について知る人は少ない。現在，かつての渤海の地-中国東北部，沿海州，朝鮮半島北部に生きる人びとも渤海国については忘れられているという。

本書は，従来，あまり知られることがなかった渤海と日本との交流関係について，使節の往来を中心に整理し，日渤交渉の実像を説いたもので，古代東アジア史の研究に一石を投じる問題提起の書となっている。

渤海史の解明が遅れている理由の一つは，渤海国の直接史料が失われていることであるが，上田氏は日本側の史料を丹念に読んで，日渤使節の49回の往来を指摘する。渤海使（船）の来航34回，遣（送）渤海使15回をそれぞれ年次順に整理して掲げる。ついで，使節の航期を時候の挨拶文より分析して，渤→日は秋から冬，日→渤は春から夏，と推定し季節風の利用を指摘している。また，両国の港と船，さらに日渤航路についての見解が披瀝（ひれき）され，海事史的な視角が存分に活用されている。

このような日渤間の交渉を，広い視野より位置づけようとする孫氏によって，東アジア世界における渤海像が述べられている。

渤海国には東西南中上の五京があったが，上京竜泉府（現黒竜江省）がその中心であった。そこに残る東京城跡より，かつて一枚の和同開珎が発見されたことがある。一枚の銅銭ではあるが，日渤交渉の舞台であった竜泉府よりの出土はきわめて重要である。直接的な史料が失われた渤海国にとって，関連諸国の史料とともに自国の物質的史料のもつ歴史的意義は大きい。

近年，渤海の遺跡遺物に対する関心が盛んになりつつあるが，日本の史料によって日渤交流の側面を説いた本書は時宜をえたものと歓迎されよう。

なお，著者の一人である上田雄氏は，法政大学

【文献紹介】

1982年12月のAncona地すべり：変わりやすい速度で発達する深層重力的斜面変形の事変

Mauro Coltorti, Francesco Dramis, Bernardino Gentili and Gilberto Pambianchi (1985) : The December 1982 Ancona landslide : a case of deep-seated gravitational slope deformation evolving at unsteady rate. Z.Geomorph. N.F.29, 3, p 335~345.

1982年12月13日の豪雨の後に，Ancona西郊のMontagnolo丘陵の北斜面に3.4kmを超える巨大地すべりが発生した。急速な変形は数時間後に停止したが，地すべり地は重力的運動の長い歴史をもっている。1858年にも発生した“Barducci”地すべりは継続性と激しい活動により知られている。イタリア半島では起伏量，ネオテクトニクス，地震活動，基盤の構造によって，多くの巨大地すべりが発生する。それらは更新世末期以降の速度の異なる全般的隆起によって変形が開始されたことを示唆する。

地すべり地は中下部鮮新統（泥灰岩質粘土と緻密砂層との互層であるが，泥灰岩質粘土が優勢する）と更新統（砂層）より構成される。構造的には北部アペニン山地の走向に調和的なNW—SEの褶曲軸とNW—SE，NE—SWの断層系がみられる。主要な構造運動は中期鮮新世—初期更新世の褶曲運動，初期更新世の断層運動，初期更新世末期開始と推測される隆起運動である。NE—SWの断層に沿う震央の配列が推測され地震活動も活発である。

地すべり地は適度の起伏をもつ緩傾斜で平滑な地形であるが，崖，階段状地形，排水不良凹地，逆傾斜斜面が判読される。平行する上部地溝と下部地溝がみられ，後者は正断層に沿い配列する。下部地溝は上部地溝下の斜面を2分するNNW—

通信教育部地理学科を1974年3月に卒業し，現在，兵庫県立尼崎稲園高校教諭で，本会会員である。また，この書評は読売新聞（1990年3月12日付）から転載したことをことうわておく。

SSEの急崖によって分断されている。地溝より下部は凹凸のある斜面が海側へ広がり傾斜は急になるが、河蝕、物質移動、人為による複雑な地形を呈する。1982年12月の運動に関連して主要頂部急崖、逆向き小崖、小崖列、亀裂と階段、伸張亀裂、深部剪断面の海面への露出と pressure ridge の形成、山麓斜面の表層すべりと滑動寸前の現象が発生した。1982年12月前後作成の2,000分の1地形図の比較から、地すべり地周辺部で数m以下、中央部で10—12mの変形が認められる。地盤の低下、小崖の再動による不等沈下、地すべり地末端の隆起などによって建物が損害を受け、鉄道、自動車道も剪断面の地表露出により分断された。

すべり面は120m以上の深度にあって、中央部の強度の変形は最大の起伏と重力的応力に起因する。正断層に沿う長い地溝の形成は、中部イタリアの急速な隆起の反映と推測される。これは先在

する構造的転位を示し、他地域で最近観測されたような地震的衝撃によるものであろう。最大変位地域外の重力的諸現象と再動を示す表面的特徴は、沖合に出現可能性のある活発な深部剪断面の存在を示唆する。地形的証拠、建物の変位、地形的資料によると、深層すべりによる変形は限られているので、深層変形に誘導された表層すべりではなく、相対的に重要な局地的変位を生じたと解される。現在の斜面形は深層運動の不連続的段階的活動、小規模な継続的変形、停止期の表面営力による部分的平滑化を示す。

地すべりの再動には激しい先行降雨が決定的役割を演じてきたが、山麓斜面の海蝕、ネオテクトニクスによる変形、地震活動なども長期にわたる営力として考慮に値しよう。

[市瀬由自・法政大学文学部地理学教室]

## 1990年度法政大学地理学会 総会研究発表要旨

### <学部卒業論文>

寒候期における関東地方の視程分布と  
その推移

上野 誠

〔目的〕 これまで視程の研究では、点的もしくは一時的な観点から解析したものが多かった。しかし、時空間的な視程の推移や季節的な視程の傾向については不明な点が多い。主観的に述べると、関東地方において、暖候期よりも寒候期の方が相対的に視程が良いと私には感じられる。そこで本研究では視程の季節的な傾向を明らかにし、寒候期の特定の気圧配置下における関東地方の視程分布とその推移を検討することを目的とした。

〔方法〕 1). 視程の季節的な傾向を検討するにあたっては、成蹊気象観測所報告第29～31号を使用した。この中から1986年～1988年の3年間で各月

毎に3つの視程目標物が見えた日の割合を算出し、季節的な傾向を見た。

2). 特定の気圧配置の選定については、寒候期における典型的な気圧配置型4つを午前9時の地上天気図から抽出した。即ち①春の移動性高気圧型、②秋の移動性高気圧型、③冬型の崩れ型、④冬型への移行型である。

関東地方の視程推移を検討するにあたっては、これら4つの気圧配置が変化していく前後の1日までをとり、その期間の視程の推移を3時間毎に見た。選定した事例は1986年4月から1989年1月までのうちの20例である。使用した資料は地上気象観測日原簿（気象庁）と大気汚染月報（東京・群馬・千葉の各都県の大気汚染濃度毎時観測記録）である。関東地方の各気象管署のうち、最も